

名誉会員 Savage 博士 逝く



Savage 博士
(Civil Engineering.)
(Feb. 1968 より)

名誉会員 John L. Savage 博士は去る 1967 年 12 月 28 日 88 才で、コロラド州 Engle Wood の Julia Temple 看護病院で逝去されました。

未亡人からの来信によって最近わかったのですが、おくれればながら、ここに謹んで哀悼の意を表します。

博士は 1903 年 Wisconsin 大学を卒業後、米国 Denver の開発局の主任技師として 12 年間、Hoover ダムや Grand Coulee ダムなどの大計画のほかに、Shasta, Perker, Imperial などのダムをはじめ、カリフォルニアの All-American Canal など 40 以上におよぶ印象に残る計画の責任者であった。

1945 年開発局を辞した後は世界 20 カ国ほどの戦後の復興計画のコンサルタントとして活躍された。中にはスイスの Grand-Dixence ダム、インドの一連のダムおよび、中東地域、メキシコ、スペイン、オーストラリアの計画などがある。

日本には 1951 年来朝、1 週間滞在し、わが土木学会のために講演された(第 36 巻第 11 号所載; 写真参照)。その後 1952 年春同博士から日本の技術者のために、ダムに関する貴重な文献 100 余冊をトランク 2 個につめて当学会に寄贈された、当土木学会は、初め日比谷市政専門図書館に保管を依頼しておいたが、今は学会の図書館に備えて、一般の閲覧に供されている。わが土木学会は 1953 年(昭 28)博士を名誉会員に推挙したのである。

博士はまた米国の土木学会の名誉会員であり、米国内務省の個人最高賞であるゴールドメダルほか、米国土木学会の科学功績賞のメダルを受けられた。

博士の未亡人は Denver の Retirement home (引退ホーム) で亡き夫を追憶し、博士とともに日本に来たときの数々のなつかしい思い出を胸に秘めて淋しく過しておられます。

未亡人の宛先は Mrs. John L. Savage Park Manor 317, 1801 E. 19 th Avenue Denver, Colorado 80218, U.S.A.

土木学会誌に掲載された Savage 博士の講演の一部

講 演

揚子江ダム及びその他のダムの計画について

(昭和 26.10.4. 日本工業クラブに於いて講演)

ジョン・エル・サバージ

YANGTZE GORGE AND OTHER HIGH DAMS

(JSCE Nov. 1951)

By Dr. John L. Savage

Synopsis This lecture comprises a brief outline of the Big Yangtze Gorge project in which the lecturer, Dr. John L. Savage, has been involved as a consultant engineer of the Chinese Nationalist Government and remarks on three other high dams, namely Ross Dam in California, Kosi Dam and Bakra Dam in India.

要旨 本文はサバージ博士が訪日せられた機会に我が土木学会のために講演せられた内容であつて、中国国民政府の顧問として同博士が計画された大揚子江ダム計画の概要と、ロス・ダム、コシ・ダム、バクラ・ダム等の高ダム計画について述べたものである。

本頁に日本のエンジニアの方々へ一言を添えることが出来ることを、非常に嬉しく存じます。たゞ遺憾なことに、私は日本語が話せませんし、講演を一通訳して頂いては時間ばかりですので、打合せ致しまして、1944年に作成された揚子江河谷計画についてのレポートの一部を譲渡して皆さんにお伝えする様に致しました。併しその後で8つばかり他のダム計画についてお話致しますが、これは皆さんにとって興味あることであろうと確信致します。



All good wishes to all Members of the
Japan Society of Civil Engineers.
(Oct. 10-1951) J.L. Savage

を生じた5つの提案が検討されている。その中第 1-4 案はダム建設中に排水トンネルを使用することになっているが第 5 案はこれを付加計画でグラウンド・クリーニングの方法に類似している。各候補地は宜昌市から 5-15 km 上流の宜昌河谷にあり、その中 1 つは現地視察によつて、断崖に架かることが出来たけれども、他の 4 つの候補地は、当時日本軍艦隊に余り接近してゐたために調査出来なかつた。この視察その他によつて、地質調査、地形状況、地上構造物並びに揚子

(博士備忘、レポート日本訳明瞭)
このレポートは揚子江河谷計画の予備的報告者と名付け 1944.11.9. 重慶の国民政府に提出された。このレポートの主要目的は、この計画の実現の可能性、開発の一般計画、事業に要する経費及び事業から生ずる利益を決定することにある。

こゝには夫々興つた候補地をとることによつて相違

江の甚大な流量及びその甚しい激流について、一応一般的知識を得ることが出来た。

最も有望と思われる総合計画は第 4 案で、ダムは揚子江の川が広がる宜昌から約 5 km 上流の地点で、宜昌峡谷を横切ることとなる。ダムは直線方式コンクリートダムで高さ約 160 m、天然長約 760 m、ダム中心部は溢流式水門とし、ドラムゲート及びシューブ・バルブ・アウトレットで調節することになる。洪

* 米国土木学会名誉会員、顧問技師

(土木学会 羽田 巖 記)